

井上ひさし「握手」論

～時間を超えて伝わる握手の真意～

3年8組1番 青木文哉

I はじめに

「握手」は井上ひさしによる1987年初出の短編集『ナイン』に所収された短編小説である。この作品について、青嶋康文が「読み終えたときに残る感動は、よい芝居を見終えたときに近いものがある。」¹と褒め称えているが、多くの読者もこのように感じたことであろう。

「握手」の中で使われている言葉は、小中学生にも理解しやすい比較的平易な語彙で構成されており、児童や生徒にとって読みやすく、中学校国語教科書にも教材として採択されている。また、「握手」についての先行研究も複数あり、その論文の多くが作品の持つ言語表現の特質について触れている。

さて、本論文では「握手」を論じていくにあたって以下の手順に沿って行きたい。第一に握手のあらすじと物語の核となる部分を示す(II)。次に主な登場人物であるルロイ修道士と「わたし」の、出会いの握手と別れの握手の時の心情を考察し、従来の読み方と合わせてこの物語を表面的に考察していく(III)。その後、小説の中にある特異的な言語表現に注目し、それがこの物語を深く読み解いていくにあたってどのように影響していくのかを論じていく(IV)。最後に、この作品における握手の意味と、IV章で述べたことから導かれる新しい教材としての読み方について提示したい(V)。

II 「握手」で描かれるノンバーバルコミュニケーション

「握手」は、かつて孤児であった「主人公である『わたし』」(以後「わたし」)が当時の恩師のルロイ修道士と再会してかつての思い出を振り返るが、「わたし」は、ルロイ修道士が重い病気を患い余命僅かであるということを知り、最期の別れの際にルロイ修道士の手を(かつてルロイ修道士が自分にしたように)強く握り、固い握手をするというストーリーである。

この物語について、光村図書出版の『国語3』では、「ルロイ修道士の生き方から、人の優しさや厳しさについて考える。／登場人物の動作から、人柄や心情をとらえる。」²といったことを主な「学習内容」とし、登田祥子も生徒に対して「場面設定の仕方や登場人物の描かれ方を読み取り、その人物像を的確にとらえる。／登場人物の会話に注目し、人間関係について自分の意見をもつ。」³ということを「単元の目標」としている。

すなわち、光村図書と登田は「握手」の中で登場人物の人柄や性格を読み取らせることを重視し、生徒にこの物語が持つ道徳的な側面を意識して読むように促している。

一方で、川嶋秀之は「握手」について「道徳的に扱うことはこの作品と無関係な教訓へとずれてゆくことであり、この作品の湛える魅力やそれによってもたらされる感動から離れてゆくばかりであろう。」⁴と、述べ、松本修も「この小説は読みの手続きぬきで『しみじみとしたちよっという話』として受容されかねない。だが、この小説は様々な記号の解釈をめぐる物語としての側面を持っており、その側面から接したとき、構造的なテキストとしての姿を現す。」⁵と、両

¹ 青嶋康文(2001)「喪失と伝承—井上ひさし『握手』を読む」『田中実・須貝千里編「文学の力×教材の力 中学校編3年」』所収、教育出版、p.111.

² 井上ひさし「握手」『国語3』(2005)所収、光村図書、p.28 以降、本論における引用は本書を底本とする。

³ 登田祥子(2009)「国語科学習指導案(細案)」
<http://www.hiroshima-sd.hiroshima-c.ed.jp/manabinohennkaku/h29/tyuugakubukokugosidouann1.pdf>
2019年11月19日閲覧

⁴ 川嶋秀之(2014)「井上ひさし『握手』の言語表現」『茨城大学教育学部紀要(教育総合)』増刊号所収、茨城大学教育学部、p.2

者ともにこの物語をただ単純に心温まる物語としてとらえることに懸念を抱いている。

ルロイ修道士の葬式のシーンにおいて、「わたし」の心情ははっきりと明言されず、一見謎めいた風に物語が終わっている。最後のシーンの主人公の心情が書かれていないということは、解釈の多様性を目的としていると考えられる。「恩師との死別」というわかりやすく感動的な要素を取り入れた感情移入しやすい物語であると同時に、読み手によって解釈の幅が広がっていく奥深い作品であるといえるのだ。

この「握手」を深く読み解いていく際に欠かせないものが、「ルロイ修道士の指言葉」と、『わたし』とルロイ修道士が交わした三回の握手の意味であろう。ルロイ修道士は癖で、自身の感情の変化や、生徒に対して何かを伝えたいときに、言葉ではなく自分の指を伸ばしたり、クロスさせたりして意図を教え子に伝えていた。たとえば、「お前は悪い子だ」と怒鳴る代わりに両手の人差し指をせわしく打ち付けていた。この仕草を「わたし」はルロイ修道士の葬式の際に真似る。本稿では、「わたし」がなぜルロイ修道士を真似たのか、その理由を考察したい。

また、作品の中で「わたし」とルロイ修道士は三回握手を交わしている。物語の中において、時系列的には二番目の再会時の握手が最初に書かれているが、本稿では時系列に沿って三回の握手の意味を読み解いていきたい。出会いの握手は天使園で交わされ、それは「わたし」が孤児として天使園に入園したときに、ルロイ修道士が交わした力強い握手であった。二回目の握手は再会時に行われ、その握手は、「わたし」が想像していた出会いの握手とは異なる穏やかな握手であった。別れの握手では、逆に「わたし」のほうがかつてのルロイ修道士のように彼の手を力強く握って、上下に何度も振った。それに対してルロイ修道士は「顔をしかめてみせ」(p.26)で、「痛いですよ」(p.26)と言った。最も注目すべきは「わたし」とルロイ修道士との最期の別れの際に交わした握手であろう。織田保夫はこの握手について次のように論じている。

かつて天使園に収容された「わたし」を迎えてくれたのは、ルロイ修道士の力強い握手だった。そして今度は「わたし」がルロイ修道士の手をしっかりと握り、激しく振ったのである。この二つの握手は二人の出会いと別れの形であった。しかもその別れが死別であるとき、握手は生と死の根源的な深みでのドラマを最も純化された形で象徴することになる。この作品における感動の基盤はまさにそこにある。⁶

すなわち、織田は別れの際の握手はこの物語の一番の盛り上がりであるとしてとらえているのだ。また、力の入れ具合に注目すると、出会いと別れの握手とでは、力を入れる人物が入れ替わり、間の二回目の握手はお互いに力を緩めている。ここから二人の握手にはある種の対照的な性質があることもうかがえる。この規則性はおそらく意図して設定されたものであろう。⁷

本稿では、指言葉や握手といったノンバーバルコミュニケーションの持つ意味について考察し、それは作品の主題にどう影響してくるのかということ論じたい。

Ⅲ 出会いの握手と別れの握手の際の「わたし」とルロイ修道士の心情

(1) 出会いの握手の際の「わたし」とルロイ修道士の心情

「わたし」はかつて親に捨てられた孤児であり、ルロイ修道士との出会いは孤児院の園長室であった。その時の握手を「わたし」は「彼の握手は万力より強く、しかも腕を上下させるものだから、こっちの肘が机の上に立ててあった聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。」(p.18-9)と、回想している。この時点で、「わたし」はルロイ修道士との握手について全く好意的な印象は持っていない。それどころか、西洋料理店でルロイ修道士が手を差し出したときに「思わず顔をしかめた」(p.17)ほど出会いの握手が影響し、強いトラウマを抱いていたということがわかる。加

⁵ 松本修(1998)『『握手』小論——精神の伝承の物語』『Groupe Bricolage紀要(16)』所収、上越教育大学、p.61

⁶ 織田保夫(2001)『『握手』の構造』田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』所収、教育出版、pp.105~106

⁷ 出会いと別れの握手が対照的であることは、川嶋(2014、4に同じ)も指摘している。

えて、ルロイ修道士の力強い握手は天使園の子供が考えだした簡単な禁忌である「天使の十戒」にも触れられていて、その内容は、「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず（二、三日鉛筆が握れなくなっても知らないよ）」(p.18) といったものである。このことから、「わたし」だけでなく天使園の子供たちもルロイ修道士との握手を経験し、その握手に関して少なからず警戒心を抱いていたということが読み取れる。

次にルロイ修道士の心情を考察したい。

天使園には、「ルロイ修道士はかつて戦時中に理不尽に左手の人差し指を木槌でつぶされてしまった過去を持っている」という噂が流れていた。そのため天使園の子供たちは、ルロイ修道士は「ルロイ先生はいい人だが、心の底では日本人を恨んでいる」(p.19) と感じていた。しかし、子供たちからみてルロイ修道士は「子どものために、泥だらけになって野菜をつくり鶏を育て」(p.19) る元気で優しい先生であり、ルロイ修道士が日本人を恨んでいるという悪い噂も、子供たちが「おひたしの汁の身になった野菜が私たちの口に入るところをあんなにうれしそうに眺めているルロイ先生を、ほんの少しでも疑っては罰が当る」(p.19) と思い、すぐに立ち消えた。このことから、ルロイ修道士は天使園の園児想いで、自身をひどい目に合わせた日本人を恨む外国人とは程遠い、良心的な心の持ち主であったということが読み取れる。よって、ルロイ修道士が握手をするときに力強く手を握り必要以上に腕を振るのは、子供たちに嫌な思いをさせようとしている、と考えることはできないだろう。そこでルロイ修道士が出会いの握手の際に「わたし」に言った言葉と、その時の「わたし」の境遇について注目していきたい。

ルロイ修道士は出会いの握手の際に「わたし」に対して「ただいまからここがあなたの家です。もうなんの心配もいりませんよ。」(p.18) と声をかける。この場面において川嶋は「寝るところと食べることに不自由がないことを知らせ、大いに歓迎することを、この握手によって表しているのである。」⁸ と考察しているが、この言葉は、孤児として捨てられた「わたし」に対しての言葉である。この言葉とルロイ修道士の人柄とを照らし合わせると、ルロイ修道士が「わたし」に対して力強い握手をしたのは、おそらく親に捨てられ頼る人も住む家もなくなってしまった不安でいっぱいであるはずの孤児である「わたし」に対して、手を力強く握ることで不安を和らげようとしたからであろう。

もしそうであるなら、西洋料理店で再会したときにはもう「わたし」の不安を和らげる必要はないので、交わした握手が「顔をしかめるほど強い握手」ではなく「実に穏やかな握手」(p.17) であったということも裏付けられる。

つまり、ルロイ修道士は「わたし」の中にある不安を和らげるために力を込めて握手をしたが、「わたし」は天使園での握手があまりに力強い握手であったため、警戒心や嫌悪感などの負の感情しか残らずルロイ修道士の思いは伝わらなかったというように考察できる。

補足だが、ここで時系列順では二番目の握手になる「再会の握手」について触れておきたい。ルロイ修道士と「わたし」との二回目の握手は、再会時の上野公園の近くの西洋料理店にて交わされる。ここでの握手について「わたし」は、「顔をしかめる必要はな」(p.17) い「実に穏やかな握手」(p.17) であったと回想している。先ほど述べたことから二人の二回目の握手について考えると、ルロイ修道士はもう「わたし」の不安を和らげる必要もなく、「わたし」も手を出したルロイ修道士に応じて握手をしたため、この握手自体に大きな意味はないと思われる。しかし、ルロイ修道士が「穏やかな握手」をしたことで「わたし」は違和感を覚え、それが結果的に別れの握手につながったという意味では二回目の握手はこの物語のクライマックスへつながる懸け橋のような役割をしたと思われる。

(2) 別れの握手の時の二人の心情とそれ以降の「わたし」の心情変化

次に、「わたし」の三回目の別れの握手と葬式の場面における「わたし」の心情について考

⁸ 川嶋秀之 (2014) 「井上ひさし『握手』の言語表現」『茨城大学教育学部紀要 (教育総合)』増刊号所収、茨城大学教育学部、p.9

察する。「わたし」はルロイ修道士との思い出話に花を咲かせている中で、ルロイ修道士に違和感を抱く。そして、「わたし」は、彼が「重い病気にかか」(p.24)り、この再会の挨拶は「この世のいとまごい」(p.24)であり「お別れの儀式」(p.25)であることを悟る。しかし、そのことを直接聞けないままルロイ修道士の乗る汽車の時刻になった。

別れの握手の際に、「わたし」は「わかりましたと答える代わりに右の親指をぴんと立てて」「ルロイ修道士の手を取ってしっかりと握」(p.26)り、「それでも足りずに、腕を上下に激しく振」(p.26)った。このときの「わたし」はルロイ修道士の癖である指言葉と、かつてのルロイ修道士の特徴の一つであった力強い握手を真似ている。この点について織田は、

「わたし」がルロイ修道士の指言葉をまね、ルロイ修道士の手を強く握って振ったのは、ルロイ修道士の表現の形を受容したことを意味する。そして、表現の形を受容するとは、その思考の形を受容するということだ。⁹

と述べている。すなわち、別れの握手の際に「わたし」はかつてルロイ修道士が自分に力強い握手をした際の心の内を理解したということである。そして、自身の恩師との死別の挨拶として、言葉にならない感謝や惜別の念をすべて握手に込めて力強く握ったのではないだろうか。

次に、別れの握手の際のルロイ修道士の心情を考察する。「わたし」の握手に対してルロイ修道士は「痛いですよ」と返す。「わたし」が別れの握手にこめた感謝や惜別の念はルロイ修道士に伝わったのかということに対して、川嶋は、

ルロイ修道士は「わたし」の思いを理解しただろうか。できていないはずである。一方が思いを込めて強く握りしめるため、他方はそこに込められた思いを、その痛みと思いの過剰性ゆえに理解できない。¹⁰

と、ルロイ修道士は「わたし」の気持ちを理解できずにこの世を去ったと解釈している。

しかし、そうだとすると不自然な点が残る。それは、別れの握手のシーンにおけるシチュエーションと握手の前の二人の談笑である。

別れの握手とはルロイ修道士との死別という形の「別れの握手」である。握手を交わす前の二人の会話は、非常に温かい空気に進んでいた。そのような状況でかつての教え子（「わたし」）が、かつての自分（ルロイ修道士）を真似たかのような固い握手をして別れた、となれば、握手をされたことでルロイ修道士に最初に生じる感情は本当に不快感だといえるだろうか。

かつて、ルロイ修道士が天使園に入園してきた「わたし」に対してした握手には、愛情と優しさが込められていた。ルロイ修道士にとって固い握手というものは、相手への愛情や思いやりの象徴であるため、「わたし」がルロイ修道士に固い握手をしたとき、ルロイ修道士は「わたし」が握手に込めた温かい気持ちを感じ取ったと考えることは、自然な流れであるといえるだろう。そして、そこから生まれてくる感情は「わたし」への愛情と感謝のようなものではないだろうか。

二人は、別れの握手の時には互いに相手に対する温かい気持ちを抱いていた。しかし、ルロイ修道士の葬式の場面で、「わたし」は再会時のルロイ修道士が「身体じゅうが悪い腫瘍の巣」(p.28)となっていたこと知り、そのことを聞いたとき、「わたし」は「知らぬ間に、両手の人さし指を交差させせわしく打ちつけていた」(p.28)。この場面の「わたし」の心の内を川嶋は次のように代弁している。

ルロイ先生、最初の出会いの時あなたがあんなにも強く手を握ったことの意味がわかりました。でも、最後の上野駅での別れの時わたしが強く握った意味は、「痛いですよ。」と顔

⁹ 織田保夫 (2001) 『『握手』の構造』田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』所収、教育出版 p.108

¹⁰ 川嶋秀之 (2014) 「井上ひさし『握手』の言語表現」『茨城大学教育学部紀要 (教育総合)』増刊号所収、茨城大学教育学部、p.9

をしかめたのですから、わたしの思いは届かなかったのでしょうか。わたしもルロイ先生の握手の意味を理解するためには時間が掛かりました。先生はあその後すぐに亡くなられたので、わたしが握手に込めた思いを知ってもらう機会が永遠に失われました。残念でなりません。

11

すなわち、「わたし」は言葉にならない気持ちを握手というノンバーバルコミュニケーションを使って伝えようとしたばかりに、自分の気持ちが伝わらなかったことに非常に後悔している。ルロイ修道士は別れの握手の際に「わたし」の握手に対しての拒絶反応の言葉ともとれる「痛いですよ」という返事をした。このから、「わたし」は握手に込めた自分の想いはルロイ修道士には伝わらなかったと感じたのだ。

以上のことより、川嶋の読み方に則すと、「わたし」はルロイ修道士の葬式の時点では、ルロイ修道士との最期の別れで出会いの握手の際のルロイ修道士の自分への愛情が理解できたが、別れの握手の際の自分自身の気持ちはルロイ修道士に伝わらなかったと感じ、深い後悔とやるせない思いを抱えてしまったというように解釈ができる（葬式から現在までではなく、葬式の時点に限定している理由は後述する）。

川嶋の解釈に沿ってこの物語を考察すると、この物語はルロイ修道士が最期に「わたし」に対して温かい気持ちを抱いたのにも関わらず、「わたし」はそのことに気づかずに気持ちがすれ違ったというアンハッピーエンドで収まる物語となってしまうであろう。しかし、この考察はあくまで「ルロイ修道士の葬式の時点まで」の二人の心情をもとに考えたものである。この物語は「まもなく一周忌である」（p.26-28）という、葬式から約一年経った時の視点から語られているのである。葬式の時点では「わたし」は自分自身の後悔に苛まれているが、一年後もずっと後悔し続けているか否かは断言できないであろう。それどころか、語りに注目すると、葬式の時から「わたし」の心情が大きく変化したと思われる描写が存在する。IV章ではルロイ修道士の死から一年経った時の「わたし」の心情の変化について、この物語中の言語表現に注目して考察していく。

IV 「わたし」のその後の心情の変化とこの物語の終着点

(1) 「顔をしかめてみせた」から考えられる「わたし」の心情の変化

この物語は「わたし」が体験を語る形で物語が進行しているが、別れの握手を交わしたときのルロイ修道士の様子を「わたし」は次のように語っている。

わかりましたと答える代わりに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。

「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。(p.26)、(傍線部は筆者。以下同様)

注目すべきは「ルロイ修道士は顔をしかめてみせた」という部分である。当然のことだが、「顔をしかめてみせた」のは「ルロイ修道士」であり、「しかめた」ではなく「しかめてみせた」と書かれていることだ。ルロイ修道士は思わず顔をしかめたのではなく、意識的に顔をしかめたということである。

また、この作品は主人公による一人称の語りから成る作品である。そのため、主人公の視点で話が進み、主人公以外の人物の心情がわからないため外面的なことではしか心情や感情を描くことができない。つまり、ここではルロイ修道士が「顔をしかめた」とするのが自然であり、主人公の目線からだとルロイ修道士の心情をあくまで主人公の主観からしか表現できないため、「しかめてみせた」とするのは本来不自然であるはずだ。逆に言えば、「わたし」がこの場面で「しかめてみせた」と語っているということは、この場面において、「わたし」は別れの握手の際のル

¹¹ 川嶋秀之（2014）「井上ひさし『握手』の言語表現」『茨城大学教育学部紀要（教育総合）』増刊号所収、茨城大学教育学部、p.10

ロイ修道士の心情が理解できたと考えるほかない。先ほど述べたように、別れの握手の際のルロイ修道士の心情は「わたし」に対する感謝や愛情である。つまり、「わたし」は「まもなく一周忌」(p.26-28)となる語りの現在には、別れの握手の際にルロイ修道士が抱いた温かい気持ちを理解した、ということになる。

では、なぜ別れの握手の際にルロイ修道士は顔をしかめたのであろうか。一見ルロイ修道士が顔を意識的にしかめたというのは、それだけ「わたし」に力強い握手に対しての不快感を示したかったゆえであると読めそうだ。ソン・ジヒョンは、

「再帰的な表情・身振り動詞」, 「表情・身振り動詞」の「可視動詞」が「してみせる」の形をとっている場合, 3人称主語の文の際には「してみせる」が文中でとる形が過去形か非過去形かに関わらず「表情や身振り・手振りの提示」の意味になり, 1人称主語の文の際には過去形をとっているときのみ「表情や身振り・手振りの提示」の意味になる。¹²

と、「してみせた」という表現はその表情で相手に自分の感情を伝える効果があると述べている。この論に則して別れの握手の部分を読み解くと、ルロイ修道士の本心は「わたし」の握手に対する不快感であり、「わたし」が握手に込めた思いは伝わらなかったとの解釈に至りそうである。

しかし、「してみせた」という表現の意味において、井上直美は、「日本語学習教材には記述がない」¹³と述べており、「してみせる」という表現の意味は定まっておらず、多岐にわたるということを指摘している。Ⅲ章で述べた通り、この時のルロイ修道士が別れの握手で抱いた感情は「わたし」に対する愛情と感謝である。以上のことより、ルロイ修道士が「顔をしかめてみせた」のは、「わたし」の握手に対する不快感の表れではなく、自分の内面を表面上のしぐさや表情によって隠そうとしているからであると考えられる¹⁴。

正確にはわからなくとも、この場面でルロイ修道士が顔をしかめてみせたのは、彼がおどけて、「わたし」がかつてのルロイ修道士の真似をして握手をしたので、彼もかつての「わたし」がしたように「表情をゆがませてみせた」、というような冗談半分でしたものだと推測することもできよう。あるいは、「わたし」がルロイ修道士は不治の病を抱えていることを悟ったがそれを直接は聞かず、あえて「握手」という二人をつなぐノンバーバルコミュニケーションによって自分への思いやりの気持ちを伝えてくれたことで感動し泣きそうになり、それをこらえようとしたために顔をしかめたような表情になったから、という説明も成り立つであろう。いずれにしても、この場面でのルロイ修道士の感情は、本来の「顔をしかめる」ことから考えられる感情とは正反対のものだろうと考えられる。

つまり「しかめてみせた」と、意識的にしかめたという描写にすることによって、「わたし」が、語りの現在において別れの握手の際のルロイ修道士の気持ちが理解できたことを暗示しているのである。

(2) 「まもなく一周忌である」が示す隠されたエピローグ

「握手」の中の出来事や「わたし」の心情を時系列順に並べると、次頁の【図1】の通りになる。

葬式のシーンまでを見れば、この物語における握手とは気持ちが強すぎるゆえに伝わらない一方通行のコミュニケーションツールに過ぎず、この物語の結末はバッドエンドだと言わざるを得ない。しかし、この物語に存在する「まもなく一周忌である」現在の時間軸まで考えれば、最終的に「わたし」は別れの握手の際のルロイ修道士の心情が理解できたのであり、言い換えれば「わたし」は、自分がかつての師への握手に込めた思いが伝わったと気づいたということである。このことは「握手」の結末はハッピーエンドであることを思わせる。

つまり、たった一行で一見不要そうにも見える「まもなく一周忌である。」という一文は「握手」

¹² ソン・ジヒョン (2009) 『『してみせる』の意味、用法について——『してみせる』の形をとる動詞の語彙的な意味との関わりを中心に——』『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.1所収、東京外国語大学大学院地域文化研究科グローバルCOEプログラム、p.165

¹³ 井上直美 (2019) 『『テミセル』表現に関する一考察——書き言葉における文末『てみせる。』の使用実態』、『さいたま言語研究』第3号所収、さいたま言語研究会、p.34

¹⁴ 例文を出すなら「私は恋人と別れて泣きそうになったが、笑ってみせた。」というような表現と同様である。

【図1】「握手」における出来事と「わたし」の心情変化（筆者まとめ）

時間軸	①出会いの握手	②再会時	③別れの握手	④葬式	⑤葬式から約一年後
出来事	ルロイ修道士から「わたし」への力強い握手	ルロイ修道士から「わたし」への穏やかな握手	「わたし」からルロイ修道士への力強い握手	「わたし」が両手の指をせわしく打ち付ける	「握手」を語っている
「わたし」の心情	強いトラウマ、不快感	ルロイ修道士の不治の病への疑念	ルロイ修道士に対する感謝、惜別の念	別れの握手に対しての後悔	別れの握手の際のルロイ修道士の気持ちを理解した

を読むうえで物語をバッドエンドからハッピーエンドへと転換する極めて大切な文であるといえる。

補足だが、ルロイ修道士の気持ちを理解できたのが上に示した表の③と④の間でないのは、ルロイ修道士の葬式で「わたし」が両手の指をせわしく打ち付けていたためであり、指をせわしく打ち付けたのは、Ⅲ章で述べたように別れの握手で自分の気持ちがルロイ修道士に伝わらなかったと感じたことへの後悔である。よって、③と④の間でルロイ修道士の気持ちに気付いたというのは不自然だとなる。このことから、「まもなく一周忌である。」という語りの現在を示しているこのフレーズは、この物語の結末をハッピーエンドのものとして読むにはなくてはならないものとなっているのである。

V 教材としての新しい読み方の提案

「握手」は織田が言うように「わかりやすく感動的な作品」¹⁵であり、その最大の要因は「かつての恩師との死別」というシチュエーションにあると言える。一方でその作品の内容は極めて奥が深いものであり、ラストシーンの中の一文によって結末が反転するという、言語感覚に秀でた井上ならではの作品であるとも言えるだろう。

最後にこの作品における握手の構造的な意味について触れておきたい。出会いの握手はルロイ修道士から「わたし」への握手だったが、「わたし」に握手に込められた気持ちが伝わるのに時間がかかった。それと同様に「わたし」がルロイ修道士へした別れの握手も、「わたし」が握手に込めた思いが正しく伝わったと「わたし」が認識するのに時間がかかった。

ここからこの作品における握手は、お互いが相手に対して愛情や感謝などの温かい気持ちを込めるしぐさだが、その気持ちが相手に伝わるのには時間がかかるノンバーバルコミュニケーションツールであるといえる。

Ⅱ章でも挙げたように、この物語をただ心温まる物語として捉えるとこのような読み方はできない。だが、心温まるこの物語の表現の細部に注目していけば、作品の構造を読み解いたり、物語の解釈の幅をより広げたりすることができる。従来の「握手」における中学生の学習内容は、道徳的な面に視点を置き、登場人物の心情を推し量るといったものが多かった。しかし、物語の中の言語表現により深く注目し、その表現が物語にどのような影響をもたらすかという観点で捉えると、新たな読み方が展開できるのではないのだろうか。

(11083字 原稿用紙27.7枚相当)

¹⁵ 織田保夫（2001）『「握手」の構造』田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』所収、教育出版p.96

【参考文献及び関連URL】

- ◆井上ひさし「握手」『国語3』（2005）所収、光村図書
- ◆青嶋康文（2001）「喪失と伝承——井上ひさし『握手』を読む」田中実・須貝千里編『文学の力 × 教材の力 中学校編3年』所収、教育出版
- ◆井上直美（2019）『『テミセル』表現に関する一考察——書き言葉における文末『てみせる。』の使用実態』『埼玉言語研究』第3号
- ◆織田保夫（2001）『『握手』の構造』田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』所収、教育出版
- ◆川嶋秀之（2014）「井上ひさし『握手』の言語表現」『茨城大学教育学部紀要（教育総合）』増刊号所収、茨城大学教育学部
- ◆菅原利晃（2006）「井上ひさし『握手』の授業：表現の深みを通して読解を深めさせる授業の試み」『札幌国語研究』第11巻所収、北海道教育大学国語国文学会
- ◆ソン・ジヒョン（2009）『『てみせる』の意味、用法について——『てみせる』の形をとる動詞の語彙的な意味との関わりを中心に——』『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.1所収、東京外国語大学大学院地域文化研究科グローバルCOEプログラム
- ◆松本修（1998）『『握手』小論——精神の伝承の物語』『Groupe Bricolage紀要（16）』所収、上越教育大学
- ◆登田祥子（2009）「国語科学習指導案（細案）」
<http://www.hiroshima-sd.hiroshima-c.ed.jp/manabinohennkaku/h29/tyuugakubukokugosidouann1.pdf> 2019年11月19日閲覧